「第５回　おいしいね　たのしいね！」地域貢献事業開催報告

塩田博子・堀尾昇平・高杉志緒・芳賀絵美子・濱田英司

Report on the fifth *"It's a delicious and Fun!"* Extention Lecture Jointly Organized by the Departments of Nutritional Science and Early Childhood Education and Care

by
Hiroko Shiota，Syohei Horio，Shio Takasugi，Emiko Haga，Eiji Hamada

要旨

本稿は、平成25（2013）年度に初回開催して以降、年１回の頻度で開催している本学主催の地域貢献活動「第５回　おいしいね　たのしいね！」に関する報告である。栄養健康学科教員・ボランティア学生を主体とした「親子クッキング」、保育学科教員・ボランティア学生を主体とした「親子でふれ合う活動」（手作りおもちゃ制作・伝承あそび等）を行う両学科による親子体験活動は、過去４回とも参加家族から好評であったため、平成29年度も同じ趣旨で講座を開催した。過去の活動と比べて特記すべき点は、第３回目以降、申請している「子どもゆめ基金」（独立行政法人国立青少年教育振興機構）の助成を受けた地域貢献事業として開催したことが挙げられる。その他、過去の開催に基づき、①託児の外注（第３回目から開始）、②開催回数（日数）の検討（平成25年度は１日、26年度は３日、27年度・28年度は２日）、③午前の食育活動（栄養健康学科教員担当）、④「大型絵本読みきかせ」活動の継続（第３回目から開始、一般教育教員担当）、⑤午後の親子活動（保育学科教員担当）、⑥午前・午後活動の連動性（第３回目反省点）、以上を検討して実施した。過去の開催と同様、主な開催目的である「地域住民に対し家庭における「食育」の重要性を伝える」「親子がふれ合う時間と遊び（初回・２回：手作りおもちゃ、３回：伝承遊び、４回・５回：大型工作体験）の良さを味わう機会を提供する」双方を概ね達成することができ、参加学生も「食育」「保育」及び「家族の交流（ふれ合い）」の重要性を学ぶ機会を得ることができた。今後も双方の学科の特性を生かした合同の地域貢献事業を継続し、「食育」「保育」、双方に関連した触れ合いの場を提供することを通じて地域貢献を実現していきたい。

キーワード：食育基本法、食育推進基本計画、子育て支援、親子クッキング、保育、
段ボール工作、絵本読み聞かせ、家族交流、クジラ

1　はじめに　―本事業報告の趣旨―（事業開催起案者：塩田博子）

内閣府は、平成28年度から平成32年度における第3次食育推進基本計画において「若い世代を中心とした食育の推進」「多様な暮らしに対応した食育の推進」「健康寿命の延伸につながる食育の推進」「食の循環や環境を意識した食育の推進」「食文化の継承に向けた食育の推進」以上5つを重点とし、食育推進活動を行っている。下関でも「第二次下関ぶちうま食育プラン」（計画期間：平成25年度～29年度）を策定し、「自分自身や愛する人の心と体を大切にする人間性を育み、人と人、命と命のつながりが強まる豊かな社会づくり」という理念のもとに多様な活動が行われている(注1)。

このような社会的動向に基づき、本学では2学科（栄養健康学科・保育学科）の専門性を生かした地域貢献事業「おいしいね　たのしいね！」を平成25年度より開催している(注2)。

最初に過去4回の概要を振り返りたい。開催時期は毎年6月が「食育月間」、毎月19日が「食育の日」となっているため6月の開催を主軸として実施している。開催日数は、平成25年度第1回は1日間、平成26年度第2回は当初1日であったが定員数超過の申し込みをふまえ合計3日間開催した(注3)。その後、平成27年度第3回・28年度第4回は、各回合計2日間、開催した。参加者の満足度について実施アンケートの回答をみると、「今日一日を楽しくすごしたか」に対して「はい」という回答が、平成25・26年・28年度共に100%、27年度は97%を得ることができ(注4)、平成28年度自由記述欄に「また参加したい」「今年も楽しかった」という回答もみえた(注5)。

このような過去4回の参加者満足度・開催スタッフの反省会に基づき食育・保育・家庭交流の推進を図るため、平成28年度も継続的な講座の開催が必要であると分析し、平成29年度、第5回「おいしいね　たのしいね！」事業を行うこととなった。

開催にあたり第3回、第4回に続き、独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」（平成13年創設、以下「子どもゆめ基金」と略記）に助成応募を行ったところ採択された。助成申請の目的は、運営費・運営形態の改善〔①参加者徴収参加費の軽減分による学校会計負担の増加、②参加対象者（3歳～就学前家庭のため3歳未満児の兄弟姉妹を持つ参加家庭）に対する安全な託児サービスの提供〕である(注3)。助成応募締め切りは、平成28年11月、即ち開催前年度中であったため、平成28年10月、第5回の開催目的を担当教員で話し合った。その結果、開催目的は、前回同様、①「世代間交流・家族間交流」、②「地域住民に対し、家庭における「食育」の重要性を伝える」、③「モノづくりの意識向上・創造力の構築」、

④「講話や「食育」を主題とする絵本を通じて食に関する知識の増進・読書推進を図る」、以上４点とした。

第４回（前回）との大きな相違点は、下関と歴史的に深い関わりがある「クジラ」を統一テーマとして、午前・午後の活動を展開したことである。クジラは現在、「下関水産５大ブランド」とされ、「食育」の面でも下関市が普及啓発に取り組んでいる（注１）。前回は、昔話を主軸に置き、午前：おにぎり・とりじゃが作り・会食、午後：（大型工作）お城づくり、という活動を行ったが、今回はより具体的で一つのテーマを主軸にすることによって、午前・午後の活動の一貫性を図ることを試みた。

以上のような経過をふまえて、平成29年４月「子どもゆめ基金」助成採択通知を受け、第３回・第４回と同様に地域貢献事業として実施した。次章では、過去４回とは特に異なる点を中心に「第５回　おいしいね　たのしいね！」開催報告を行う。

2　実施準備について―広報・募集・会計・受付と班編成―（担当教員：芳賀絵美子・高杉志緒）

以下、今回の実施のための概要について、即ち実施前に準備した広報、募集（参加者募集）、会計（収入・支出）、託児・当日受付について記す。

【広報】

広報活動については、第３回以降「こどもゆめ基金」採択決定後の４月末から始めている。今回は、チラシ作成を本学卒業生の上田裕司さんに依頼した。（**図１**）無料広告は「ほっぷ」（５月12日発行）「サンデー下関」（５月20日発行）と「プラス１（ワン）」（週刊リフレッシュ・ポスティング版）（５月26日発行）に掲載され、前回と同様に旧市内の幼稚園18園、認定こども園13園、保育所39園、児童館４館、その他２施設への郵送および訪問配布も引き続き行い、ショッピングセンターや市の施設にもチラシを配置していただいた（**表１**）。

図１　配布チラシ

開催に関する報道は、ＮＨＫ山口放送局の取材による開催初日（６月24日）同日「山口のニュース」（ＮＨＫ総合・山口放送）における約３分間の放映紹介、新聞報道「鯨肉料理おいし

表１　下関旧市内施設へのチラシ・ポスターの配布先

	郵送	訪問配布	合計（件）
幼稚園	18	0	18
認定こども園	10	3	13
保育所	38	1	39
児童館	3	1	4
その他	0	2	2
合　計（件）	69	7	76

い　下関親子連れら料理教室」（『山口新聞』地域総合、6月25日朝刊）、「くじらバーガー作り　下関短大で親子イベント」（『読売新聞』下関版、6月26日朝刊）による掲載紹介、以上のメディアで紹介された。

【募集】

募集（参加対象）は、過去3回の開催と同様、3歳～小学校就学前の子どもとその保護者とし、第4回目と同様、開催日は6月25日㈯・26日㈰の2日間で各日定員は子ども24名、保護者24名とした。応募方法は初回からの方法を継続して往復葉書による郵送のみで、締め切りは6月2日金曜日消印有効とした。葉書による応募者は45家族118名であり定員を超過していたが、急な欠席を見越して抽選は行わなかった。その結果、実施日の参加者は、6月25日㈯が21家族55名、6月26日㈰が23家族58名となった。

【会計：助成金・補助金・負担金】

第3回と同様に「子どもゆめ基金」の助成金（222,012円）を受けた。大まかな支出の内訳は、参加者募集用チラシの印刷と郵送・託児の外注・当日参加ボランティア学生と卒業生への謝金・大型工作材料費・事務費である。

食材については、前回まで「子どもゆめ基金」の助成対象外となるため参加者からの徴収金と本学の公開講座費で負担していた。今回はクジラをメイン食材として使用するため、平成28年度に栄養健康学科でクジラの調理実習を実施した際に助成していただいた下関市水産課へ相談に訪れた。その結果、本事業が「下関くじら普及啓発キャンペーン実行委員会」より「鯨肉を使用した調理実習」として認められ、食材費の一部37,067円の助成金を受けた。

保険料は助成対象外となるため第4回と同様、学内における公開講座予算と当日の参加費収入で賄った。参加費についても第4回と同様、幼児・保護者は各300円、託児（食事有）300円、託児（食事無）200円とした。二つの外部資金の受託と参加費収入により本学が負担した金額は前回よりも軽減され、約1500円に収まった。

【受付と班編成】

参加家族の未満児託児外注は第3回以降行っている。今回も専門の託児業者に依頼し、事前申込者を対象に当日受付で確認後、託児室に案内した（**図2**）。託児事前申込児は24日1名、

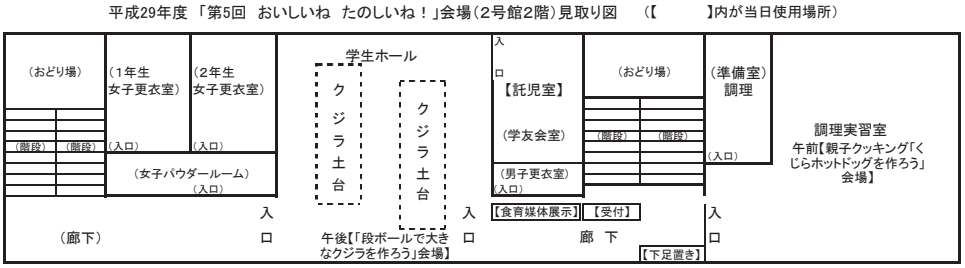


図2　第5回 「おいしいね　たのしいね」会場見取り図

25 日４名だったが、申込者側の都合により利用者は 24 日２名 •25 日４名で予定より１名増加の利用だった。

前回との違いは、参加者確認と班編成の方法である。第４回までは、事前に往復葉書による参加者連絡に基づき、子どもの年齢・家族ごとの参加人数を考慮に入れて予め班分けを行った。そして当日、受付にて参加者確認・参加費徴収・活動班の案内を行っていた。しかし、前回は、体調不良等による当日の欠席者（初日：５家族、２日目：２家族）、兄弟（異年齢児）における変更（姉の代わりに妹が参加：１家族）、夫婦間での参加者変更（妻の代わりに夫が参加：１家族、妻のみの予定が夫婦で参加：１家族）が相次ぎ、２日間とも当日朝の受付後、班編成を急遽変更せざるを得なかった。そこで今回は当日朝、受付で参加家族を把握後（**写真 1**）、担当教員が班編成を行い、開会式でホワイトボードに参加家族を記したカードを貼付けた班編成表を発表した（**写真 2**）。

写真1　受付（カード毎に記された参加家族の把握･確認作業）

写真２　ホワイトボードを使用した班分け発表（開会式）

3　実施内容報告

本章では、午前：親子クッキング（**3・1**）、午後：親子工作（**3・4**）を中心に報告を行う。

3・1　調理　―親子クッキング―

3・1・1　献立作成（担当教員：塩田博子・芳賀絵美子）

今回は、下関と歴史的に深い関わりがある「クジラ」を統一テーマとしたことから、クジラ肉をメイン食材として献立作成を始めた。クジラと言えば、硬い・独特の臭いがあるという特徴がある為、幼児が親しみやすく、保護者も調理しやすい献立を目標とした。その結果、メニューは「くじらほっとどっぐ」「ぐだくさんみねすとろーね」「きせつのくだものヨーグルト」の３つとした（**表 2、写真 3**）。クジラの臭みは、しょうがをベースにはちみつやみりんなどを使って試作をしたが、思うように臭みを除くことが出来なかった。しかし、しょうがとかんき

つの風味と甘みのあるマーマレードをまぶし下味をつけることによって解消することができた。また、クジラ肉は様々な業者のものを使用して試作を重ねた結果、焼いても柔らかく食べることができた㈱東冷の熟成肉を使用することにした。更に、当初はクジラ肉を丸いパンにはさむ「くじらバーガー」（**図 1**）の予定だったが、試作の結果、盛り付け時にクジラ肉を含めた具材を見て楽しめることと、食べやすさを考え、コッペパンを使いホットドッグにした。

表 2　子ども 1 人分の栄養価

料理名	エネルギー (kcal)	タンパク質 (g)	塩分 (g)
ホットドッグ 添え物	312	16.2	1.2
ミネストローネ	55	1.8	0.4
ヨーグルト	114	2.9	0.1
合計	481	20.9	1.7

写真 3　当日の盛り付け例
（プレート手前）「くじらほっとどっぐ」
（プレート左奥）「添え物：焼きポテト・えだまめ」
（枠外）「ぐだくさん みねすとろーね」
（プレート右奥）「きせつのくだものヨーグルト」

3・1・2　調理班と配布資料について（指導者：塩田博子・芳賀絵美子・高杉志緒）

ひと班につき 2 ～ 3 家族・各日 8 班を編成した。前年同様、各班の調理台と担当の学生の名札にはそれぞれ動物マークを提示した。2 章で述べたように、前回と方法を変えて当日朝に班編成したが、大きな混乱はなくスムーズに班へ移動することができた。配布資料は、受付にて各家庭 1 セットずつ渡した。レシピ「おやこくっきんぐれしぴ」「みじたくをととのえよう！」（栄養健康学科教員作成、**写真 4**）、「もっと知りたい！クジラブック」（下関市水産課提供、[注6]）、「たべものきかんしゃにこにこ号」（栄養健康学科教員作成、**図 3**）、「少年期」「ぶちうまいよ山口のやさい」（山口県栄養士会　保護者向け資料）、「わたしのおすすめ絵本」（学友会公認部活動ほんの倶楽部・教職員有志作成、**写真 5**）、以上 7 点である。

レシピは保護者向けとして漢字も使って作成したが、献立名は平仮名で表記し、余白には食

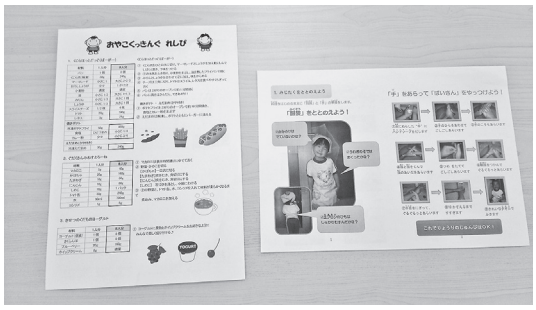


写真 4　レシピ、みじたくをととのえよう！

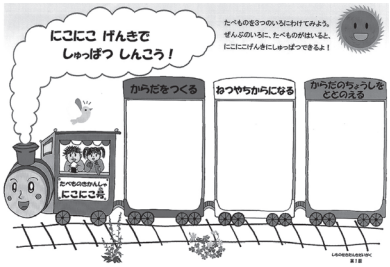


図 3　たべものきかんしゃにこにこ号

材の絵も挿入することによって親子で一緒に見てもらえるように工夫した。また、幼児に安全で衛生的な調理の基本を伝えるための「みじたくをととのえよう！」も媒体として準備した。服装の整え方、手の洗い方、楽しく料理をするためのお約束、包丁とまないたの使い方を写真やイラスト入りで分かりやすく伝えられるよう工夫した。更に、例年配布している「たべものきかんしゃにこにこ号」(注3) は、今年もラミネート加工し、自宅でくりかえし使えるものにした。使い方の説明は、会食後の食育講話の中で行った。

写真５　パンフレット「わたしのおすすめ絵本」(本文)

また、受付後に渡した配布物の１つであるリーフレット「わたしのおすすめ絵本」は、第３回以降、作成・配布している（**写真５**)。目的は、家庭での読書推進、即ち「食」に関する絵本に親しんで頂く事である。今回の掲載は６冊で、内クジラが主人公の本が３冊である。午前中の読み聞かせを行った大型絵本「くじらだ！」、午後のアンケート記入時に読み聞かせを行った絵本（まつたにみよこ「まいごのくじら」2008年復刊）をはじめ、「食」に因んだ絵本を選書した（神沢利子作・あべ弘士絵「くじらのあかちゃんおおきくなあれ」2006年、よしだきみまろ「やさいでぺったん」1991年、ふじもとのりこ作・タカハシデザイン室 絵「ケーキになあれ」2014年、とりやまみゆき 文・中の滋 絵「あれこれ　たまご」2004年)。紹介文は、学生（２冊)、卒業生（１冊)、教職員（３冊）が記入した。内容は、作者・書名・出版年といった書誌情報をはじめ「どんな本か」(概要)、(推薦者の）お気に入り」の部分など、参加保護者を対象としたイラスト入り紹介文を掲載した。

３・１・３　調理前の説明について（指導者：塩田博子、芳賀絵美子）

今回も前回同様に、手洗いから調理の方法までのレクチャーを丁寧に行うことにした。まず、レシピを見てもらいながら、本日の献立名と各班８人分作成するということを確認してから説明に入った。以降のレクチャーは「おやこくっきんぐれしぴ」「みじたくをととのえよう！」の２つの媒体を使用しながら、①包丁の持ち方とふきんの使い分け等衛生や危険回避に関する事項の説明、②フエルト媒体（栄養健康学科教員作成、**写真６**）を使った「くじらほっとどっぐ」の作り方の説明、③実際の食材を使って「ぐだくさ

写真６　フェルト媒体「くじらほっとどっぐ」

んみねすとろーね」「きせつのくだものヨーグルト」の作り方の説明、④盛り付けと使用する食器の説明、⑤学生を手本とした身だしなみの確認、⑥学生を手本とした手洗いの練習、⑦危険回避のための「おやくそく」確認、⑧班の発表と担当学生紹介（2章参照）の順に進めた。

3・1・4　調理「くじらほっとどっぐをつくろう」（指導者：塩田博子、芳賀絵美子）

前回同様、作業量を少なくして幼児が楽しんで取り組めるよう献立作成に取り組んだ。楽しみの一つとして、今回は、①クジラ肉に小麦粉をまぶす際、②焼いたポテトフライにカレー塩をまぶす際に食品用ビニール袋を使用した。ビニール袋の中で食品に小麦粉や調味料をまぶすため、幼児が一人で作業することができ、「じぶんでできた」という満足感が得られ、また、遊び感覚を取り入れることで楽しみを感じてもらえたようだった。盛り付けも、①パンに具材をはさむ、②ワックスペーパーにくじらほっとどっぐをのせる、③焼きポテトを紙コップに入れる、④ヨーグルトに果物をのせるといった作業も楽しみを感じながら親子で取り組んでいた。

当日朝、決定した班編成であったが、特に大きな問題はなく調理作業が行えた様子だった。しかし、近年「家族だけで」「お友達と同じ班で」といった要望が増えており、リスク管理の面から考えても今後の班編成および募集家族数を再考する必要があると感じた。

今回は、植物油アレルギー児（3歳）が1名おり、申込時に電話で参加可能か問い合わせがあった。誤食した場合、かゆみは出るがアナフィラキシーショックを起こす程度ではないとのことであったので、植物油の代替食品として「えごま油」を購入して対応できると回答し、参加に至った。当日は、該当者がいる班の担当となった学生をはじめ、ミーティング時に教職員・ボランティア学生全員にアレルギー児の存在を知らせ、クジラ肉は対象親子の分を別にして「えごま油」で焼くことを周知徹底した。また、同じ班になった別の親子にも事情を説明し、ご理解いただいた。こうした対応の末、事故が無く調理を終えることができた。

調理作業全体については、熟考した献立と視覚媒体を使った分かりやすいレクチャー、各班

写真7　各班に分かれての調理作業風景

写真8　班別のテーブルでの会食風景

に補助として入ったスタッフ（ボランティア学生と卒業生）の手厚い見守りが活きて、今回も大きなケガがなく調理を終えることができた（**写真 7**）。

会食は、調理班別のテーブルに分かれて行い、各班に補助として入ったスタッフも同席した（**写真 8**）。また、前回同様、食育面も考慮して使用した食器は参加者にも片づけていただいた。

写真 9　媒体（クジラとまさる君）

写真 10　講話（食べ物機関車使用）

3・2　講話（指導者：塩田博子・芳賀絵美子）

講話は、昼食開始 15 分経過頃より、学生スタッフが食育媒体（平成 28 年度１年生の栄養学実習で作成）と担当教員が「まさる君」と名付けた食育エプロン（注 7）の掛け合いによるクジラと人間の食事の違いについて説明を行った（**写真 9**）。引き続き教員スタッフも加わり、まさる君の食べたものとして本日のメニューの食材の分類と体の中での働きについても食べ物機関車で説明を行った（**写真 10**）。

今年度はクジラをテーマとし、下関市水産課「下関くじら普及啓発キャンペーン実行委員会」の協力を得ることが出来た。前述の通り（**3・1・2**）、同水産課からクジラに関するパンフレットもご提供いただいた（注 6）。また、幼児はクジラを食べた経験が少ない事を念頭に置き、保護者に対する配慮も行った。講話は、下関が近代捕鯨発祥の地であり現在も調査捕鯨船の母港を持つ町である事、クジラの栄養成分に関する事などの理解を深める内容で進めた。しかし、10 分以内の短時間だったため、不十分な説明については資料を持ち帰り、家族でゆっくりご覧頂くように紹介した。また、クジラのえさの食べ方について、下関市水産課よりお借りした、セミクジラのひげ板、ポスターパネル２枚（大隅清治ほか監修「世界の鯨類Ⅰ（ヒゲクジラのなかま）」・「世界の鯨類Ⅱ（世界の鯨類Ⅱ（ハクジラのなかま）」財団法人日本鯨類研究所発行）を使用して説明を行った。１日目は午後の工作体験終了後、閉会式直前に行ったが（**3・4・5**）、先に紹介したように昼食時に学生スタッフがクジラのえさの話を行うため、一緒に説明を行うことにより理解しやすいと考え、２日目は昼食時の講話の中で行った。これにより、２日目は人間とクジラの食事の違いについて関心が高まったと考えられる。

3・2　大型絵本読み聞かせ「くじらだ！」（指導者：高杉志緒）

第１回～３回は、保育学科「食育表現ゼミナール」所属学生（第１回３名、第２回２名、第３回３名）も本活動にボランティア参加し、1）親子クッキングの班別調理活動の補助、2）大型絵本読み聞かせ、以上２つを行ってきた。しかし、平成28年度以降、所属学生不在のため、今回は栄養健康学科２年生２名が食育絵本の読み聞かせを行った（**写真11**）。

写真11　大型絵本「くじらだ！」読み聞かせ

大型絵本読み聞かせは、第３回から食育推進・読書推進の目的で行っている。選書の基準は当初より、①当日の献立や活動に関連した内容を主題とする、②３歳児にも理解しやすい、③「親子クッキング」の会食時に楽しめる、④約50名の参加者を対象とするため大型絵本とする、以上４点である。但し、①に該当するくじらを主題とした入手可能な大型絵本は稀少であった。検討の結果、３歳以上児を対象とした　五味太郎「くじらだ！」を選書して、当日読み聞かせを行った。

全31頁で３歳児には少し長いと想定されたが、①話が、クジラを見た事がない人々がクジラを探すという内容であるため、クジラについて（とても大きい、食べることができるなど）分かり易く示されていること、②「くじらだぁ！」という３歳児でも分かり易いフレーズが文中に繰り返されていること、③どこにクジラがいるのか一緒に探しながら鑑賞できること、以上３点からこの本に決定した。

前回、（教室前方付近では）「絵本が見えにくかった」というアンケート結果をふまえて、学生が立つ場所を移動し、階段教室後方で本を開いた。前回と同様、会食中に行ったが、ほとんど私語もなく、最後まで鑑賞する姿がみられた。

3・4　大型工作「おおきなくじらをつくろう」（指導者：堀尾昇平・濱田英司）

3・4・1　午後の活動の目的・内容・活動場所について

今回も前年同様「親子がふれ合う時間とダイナミックな制作や遊びの機会を提供する」という目的のもと、参加者全員で大型工作「おおきなくじらをつくろう」を行った。

過去の活動を振り返ると３回にわたって、午後から親子・家族間の関わり合いを広げる活動としての伝承遊びを行ってきた。（第１回・２回「手作りおもちゃの制作」、第３回「伝承遊び」）。

手作りおもちゃについては、第１回「割り箸鉄砲」、第２回「トントン相撲」を制作し、その場で制作したおもちゃで遊ぶ活動を行った。第３回「伝承遊び」では、「わらべ歌」を通し

て体を動かし、親子でふれ合う活動を行った。但し、午前中に親子クッキングとして調理作業を行った後での活動となるため「午後はより開放的な環境のもと、日常生活の中では体験できないようなテーマで親子の交流を深める活動を行ってみてはどうか」という意見が出たことを勘案して、前回からは「段ボール工作」に重点を置いた活動を行っている。

また、段ボールを使用した「くじらづくり」という内容は、①参加者全員でアイデアを出し合いながら作り進めることで、一つの大きなくじらが完成するという感動が得られること、②完成したくじらの中に入ることができ、くじらの世界を感じながら作品内外でダイナミックに遊べること、③下関と歴史的に深い関わりがあり、午前中の親子クッキングのテーマでもある「クジラ」を制作することで、より一層イメージを広げながら活動できること、以上３つの理由から決定した。

活動場所は前年と同様、普段学生たちが団らん・食事を行う共有スペースである「学生ホール」の全室を使用した（**図２**）。託児スペースについては大型工作を行う上で広い場所が必要であり、活動に集中しやすくすること、託児の安全性、２つの観点から隣接する部屋（学友会室）を託児スペースとした。午後の活動を行った「学生ホール」は、普段は木製のテーブルや椅子が置いてあるが、活動中の安全面に配慮し、壁際及び学生ホール外の廊下の隅に固めて置いた。

３・４・２　大型工作「おおきなくじらをつくろう」使用材料と環境整備について

午後の大型工作「おおきなくじらをつくろう」に使用した主な材料は、畳二畳分（180㎝×180㎝）の大きさがある板状の段ボールと、形や大きさがそれぞれ違う小さい段ボールである。板状の段ボールにおいては、事前に油性の絵の具で黒く塗っておき、曲げて加工しやすいよう10㎝間隔で切れ目を入れておいたものを使用した（**写真12**）。制作においては、事前に長さが調節可能なアルミ製の棒を骨組みとして全体的な形を形成し、安全のため床にガムテープで接着・固定した上で、土台とした（**写真13**）。この土台の上に板状の段ボールを被せ、貼り合わ

写真12　クジラの体表にした大型段ボール
（畳２畳大・表面を黒塗装・10㎝間隔で切り込み有）

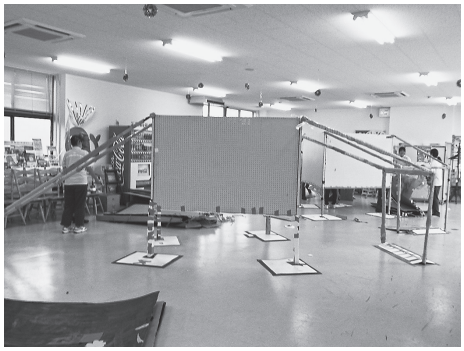


写真13　クジラ土台（木製パネル・アルミ棒）

せてクジラを作るという方法で工作を展開した。同時に、必要に応じて形や大きさがそれぞれ違う様々な段ボールを組み合わせ、尾びれ等を作り足せるようにした。クジラの土台は、参加人数が多かった事もあり、同等の骨組みを２組作り、２頭のクジラをそれぞれグループに分かれて制作できるようにした。また、全体的なクジラの形が出来上がった後に、折り紙や水性のカラーペンを用いて自由にクジラの体に模様を付けて楽しめるように工夫した。

環境の演出は、クジラの周囲が水で包まれる光景が想像できるようにした。水を表現するため青色や白色の合成繊維製のテープ合計３巻分、予め長さ１ｍ程度に切って準備した。

当日の制作環境は、それぞれの材料を入口・通路とは反対の会場奥に種類別にまとめて置き、配置した。また、洗面台の前には衝立を置いて子どもが勝手に使用できないように配慮した。同時に、大きな段ボールをはじめとした荷物の運搬や、館内１階にあるトイレを使用する際の移動が円滑に行えるよう、前回同様、学生ホール内に通路を設けた。その他、安全面での配慮として、制作中の怪我を防ぐため事前に組み立てておいたアルミ製の骨組みの全てに段ボールを巻き付け梱包し、さらに、布ガムテープを用いて床に接着した。また、クジラ土台の床の接面部分は段差が生じるので、段ボールや発泡スチロールを被せて接着することによって段差の軽減に努めた（**写真 13**）。また、完成したクジラをイメージできるよう、壁面にビニール袋と色画用紙で作ったクジラを貼り（**写真 14**）、室内に立体紙工作のクジラを配置した（**写真 15**）。

写真 14　壁面「ビニール袋と色画用紙で作ったクジラ」

写真 15　立体工作「紙工作のクジラ」

当日の指導は保育学科教員２名があたり、保育学科のボランティア学生（１日目：６名、２日目：４名）が援助にあたり、以下の順（導入、主活動、まとめ）に活動を行った。

3・4・3　大型工作「おおきなくじらをつくろう」における導入活動

調理・会食後、休憩・移動時間をはさんだ後、両日とも 13 時から活動を開始した。学生スタッフの簡単な自己紹介後、最初に段ボールを使用してクジラづくりをすることを教員が伝えた。用意した 18 枚の板状段ボールを示しながら、最初に大きな板状段ボールを骨組みに被せていき、ガムテープで固定して一つの大きなクジラの形にしてから、大小様々な段ボールをつなぎ合わせて最終的なクジラの形を作り上げることを説明した。最終的に完成するクジラの大きさは、斜めに向い合う形で会場（学生ホール内）いっぱいに広がり、上部から潮を吹く様子を表現し制作した場合には３ｍ以上ある天井に迫る程の高さになることを想定した。そのた

め、活動内容の説明においては見通しが付くよう丁寧に説明することを心掛けるとともに、大型工作への期待を高めたい部分においては実際に一部手本を示すなどしてダイナミックに説明を行った。また、制作においては、会場全体を使って自由な活動が行われるため、怪我をすることが無いよう以下の注意を口頭で行った。特に配慮したことは、①会場内を走り回らないこと、②必要に応じて使用するハサミやカッターナイフなどの文具の取り扱いに気を付けること、以上２つについて説明をした。

3・4・4 「おおきなくじらをつくろう」における活動状況

主活動すなわち制作は、全体を２つのグループに分け、基本的に参加者全員で自由にイメージを広げながら思い思いに制作を進めていくよう展開した。今回、予定した「段ボールのくじらづくり」の主な流れは、次の通りである（①～⑤）。

①大型の板状段ボールを使い、全員でクジラの全体像を作る（**写真 16**）

②大小様々な段ボールを使い、尾びれなどの細部を成形する（**写真 17**）

③折り紙やカラーペンを用いて思い思いに装飾を施す（**写真 18**）

④完成したクジラの全体を眺めたり入ったりして自由に遊ぶ（**写真 19**）

⑤完成したクジラの前でグループごとに写真を撮る（**写真 20**）

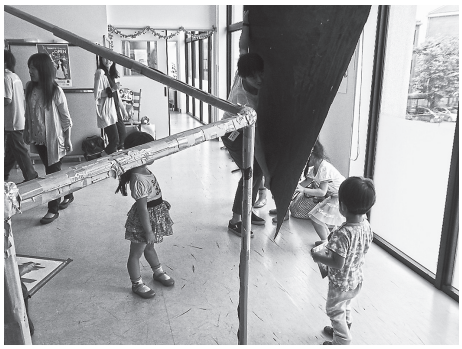


写真 16　板状ダンボールでクジラの外皮制作

写真 17　部分（尾びれ）の形成

写真 18　クジラの装飾（折り紙の貼付け）

写真 19　完成したクジラに入って遊ぶ子ども達

このような５つの工程を主体とした２日間の活動の実践を通じて、参加者の年齢や当日の進行状況に合わせて、所要時間を変える必要があることが分かった。例えば、初日は上記、①や②、③といった制作に時間が多くかかり、全体の装飾に十分な時間をかけることができなかった。そのため初日の反省から２日目は、早い段階から折り紙やカラーペン、合成繊維製のテープ等を使った制作を子どもたちに促したことで活動の幅も広がり、全体の制作を進めながら、同時にイメージしたクジラの世界をクジラの内外で作っていくという活動に時間をとることができた。④の自由な遊び時間は、段ボール迷路のように動き回る遊び方と、クジラの体を飾って楽しむ遊び方ができたため、想定していたほどは集中力が途切れずに時間いっぱい楽しむことができていたように思われる。制作については、クジラの土台（骨組み）を２頭分用意して、参加者を２つのグループに分けて制作を行った。援助における配慮点としては、基本的に親子で一緒に活動を進め、同じグループ内においては活動場所を限定しないことで、その場の流れに合わせて比較的自由な雰囲気の中で進行するようにした。また、親子での関わり合いを重視し、各々が持つくじらのイメージを広げながら活動を展開するように進めた。制作したクジラで自由に遊ぶ時には、スタッフからも子どもたちへ積極的に関わり、一緒になってクジラの体に潜り込むなどダイナミックに遊び、遊びの内容を豊かにするよう心掛け、より活動への意欲を高められるよう配慮した。

写真 20　完成したクジラの前での記念撮影

以上、①～⑤の流れを中心とした本活動は、段ボールをはじめとした身近な材料を使って短時間で大きな制作物を作り、完成した作品でダイナミックに遊び、また記念に写真を撮ることで成果を形に残して終了することを主旨として行った。さらに、記念写真を撮影することによって、参加者の充実感を高め「まとめ」や「ふり返り」が後日も出来るよう配慮した。その他にも思い出に残る活動となるよう教員やボランティア学生が適宜「よく頑張ったね」「大きくて素敵なくじらが作れたね」など、声掛けを行い、楽しい雰囲気の中で進められるよう配慮した。更に、この活動の終了時には、全体を通しての活動の達成感が得られるよう教員から「自宅でも親子での制作や遊びを共に楽しんで頂きたい」という意向を伝えて参加者全員に対する声掛けを行った。

3・4・5　アンケート・絵本読みと閉会式

【参加者アンケート実施と絵本読み聞かせについて】（担当者：塩田博子・高杉志緒）

閉会式の前に、クジラの説明（子ども対象）・アンケート記入（保護者対象）と絵本読み聞

写真 21　パネル「世界の鯨類」(2 枚)横でクジラの髭を持って説明する教員と子ども達

写真 22　アンケート記入時間に絵本「まいごのくじら」読み聞かせを聞く子ども達

かせ（子ども対象）を行った。

クジラの説明については、初日はアンケート記入前に行い（**写真 21**)、２日目は昼食時の講話で行った（**3・2**)。初日は下関市水産課から借用した「世界の鯨類Ⅰ」「世界の鯨類Ⅱ」という２枚のポスターパネルの前で、クジラには色々な種類がいること、大きさも様々であることを説明した。また、クジラのヒゲ板の実物を子ども達に触ってもらい、体の大きさを実感してもらえるように工夫した。

アンケートは、１家族につき１枚、代表の保護者に１日の活動全体に関するアンケートを記入して頂いた。回答用紙（Ａ４　１枚）は、当日学生ホール内で「くじらづくり」活動終了後に配布、記入、回収を行った。第３回目の折、保護者アンケート記入の間に、子ども達に絵本の読み聞かせを行い、子ども達が静かに待つことができるように配慮したところ保護者は記入に集中できたので、３回目以降、記入時に絵本の読み聞かせを実施している（**写真 22**)。今回は、全体テーマ（クジラ）であること、３歳児から楽しめる内容、輪郭線が太く大勢の読み聞かせに向くこと、以上に配慮して、松谷みよ子「まいごのくじら」（ブッキング、2008 年）を選書した。第３回は学生が読み聞かせを行ったが、４回以降、教員が担当している。

【参加記念品「記念メダル・ぬり絵」について】（担当教員：濱田英司）

アンケート記入・絵本読み聞かせの終了後、終了式を行った。

午前、午後の指導担当教員が、参加に対する御礼の挨拶を行った後、担当教員（濱田英司）がデザインし保育学科学生と共に作った２つの参加記念品を渡した（**写真 23**)。配布目的は前回と同様、一日の活動を締めくくるにあたって参加者、特に子どもたちに充実感・達成感を味わってもらい、帰宅後も本活動を身近に感じながら振り返ることが出来るようにするためである。

記念品の１つ目は、クジラの絵柄スタンプがついた記念メダルである（**写真 24 右**)。２つ目は、「おいしいね　たのしいね！　がんばったね！」と記したクジラのぬり絵（Ａ４判）であ

る（**写真 24 左**）。また、前回は、完成した大型工作（お城）の前で撮影した集合写真を入れた写真立てと撮影した記念写真を１家族につき１枚の記念品として提供したが、今回は、紙媒体での集合写真の提供は行わなかった。その代り、撮影・掲載をご許可頂いたご家族のみ完成した大型工作「クジラ」の前に集合して頂き、学内フェイスブックへの掲載を行った。

写真 23　メダル・塗り絵を受け取った子ども

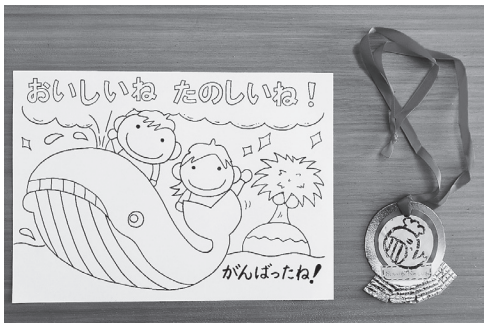
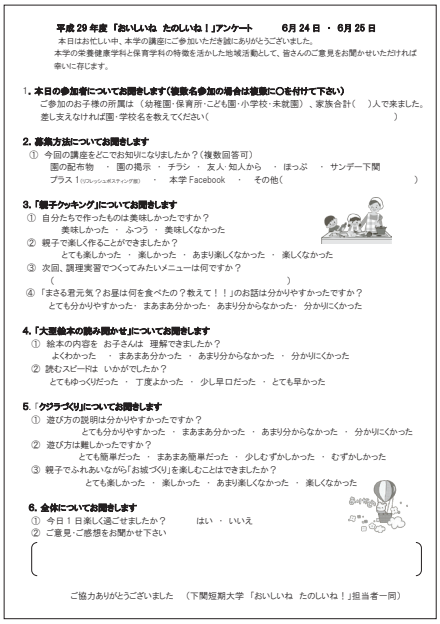


写真 24　お土産の「ぬり絵（左）とメダル（右）」

4　当日アンケート集計・報告と省察（担当教員：塩田博子・芳賀絵美子）

アンケートの調査項目は前回との比較を考慮し、ほぼ同内容の質問とした。具体的には、次の６項目 13 問である（**図 4**）。(1) 参加者について、(2) 募集方法について【①この公開講座をどこでお知りになりましたか】、(3)「親子クッキング」について【①自分たちで作ったものは美味しかったですか、②親子で楽しむことができましたか、③次回、調理実習で作ってみたいメニューはなんですか、④「まさる君元気？お昼は何を食べたの？教えて !!」のお話は分かりやすかったですか】、(4) 大型絵本読み聞かせについて【①絵本の内容をお子さんは理解できましたか、②読むスピードはいかがでしたか】、(5)「クジラづくり」について【①遊び方の説明は分かりやすかったですか、②遊び方は難しかったですか、③親子でふれあいながら「クジラづくり」を楽しむことができましたか】、(6) 全体について【①今日一日楽しく過ごせましたか、②ご意見・ご感想をお聞かせください】以上である。なお、(3) の③、(6) の②は記述式とした。



平成 29 年度「おいしいね　たのしいね！」アンケート　　6月 24 日 ・ 6月 25 日

本日はお忙しいゆ，本学の講座にご参加いただき誠にありがとうございました。
本学の栄養健康学科と保育学科の特徴を活かした地域活動として，皆さんのご意見をお聞かせいただければ幸いに存じます。

1．本日の参加者についてお聞きします（複数名参加の場合は複数に〇を付けて下さい）
ご参加のお子様の所属は（幼稚園･保育所･こども園･小学校･未就園）、家族合計（　）人で来ました。
差し支えなければ園･学校名を教えてください（　　）

2．募集方法についてお聞きします
① 今回の講座をどこでお知りになりましたか？（複数回答可）
園の配布物 ・ 園の掲示 ・ チラシ ・ 友人･知人から ・ ほっぷ ・ サンデー下関
プラス１（クレッシェンボスケッング部） ・ 本学 Facebook ・ その他（　　）

3．「親子クッキング」についてお聞きします
① 自分たちで作ったものは美味しかったですか？
美味しかった ・ ふつう ・ 美味しくなかった
② 親子で楽しく作ることができましたか？
とても楽しかった ・ 楽しかった ・ あまり楽しくなかった ・ 楽しくなかった
③ 次回、調理実習でつくってみたいメニューは何ですか？
（　　）
④「まさる君元気？お昼は何を食べたの？教えて！！」のお話は分かりやすかったですか？
とても分かりやすかった・ まあまあ分かった・ あまり分からなかった・ 分かりにくかった

4．「大型絵本の読み聞かせ」についてお聞きします
① 絵本の内容を お子さんは 理解できましたか？
よくわかった ・ まあまあ分かった ・ あまり分からなかった ・ 分かりにくかった
② 読むスピードは いかがでしたか？
とてもゆっくりだった ・ 丁度よかった ・ 少し早口だった ・ とても早かった

5．「クジラづくり」についてお聞きします
① 遊び方の説明は分かりやすかったですか？
とても分かりやすかった ・ まあまあ分かった ・ あまり分からなかった ・ 分かりにくかった
② 遊び方は難しかったですか？
とても簡単だった ・ まあまあ簡単だった ・ 少しむずかしかった ・ むずかしかった
③ 親子でふれあいながら「お城づくり」を楽しむことはできましたか？
とても楽しかった ・ 楽しかった ・ あまり楽しくなかった ・ 楽しくなかった

6．全体についてお聞きします
① 今日１日楽しく過ごせましたか？　　はい ・ いいえ
② ご意見･ご感想をお聞かせ下さい
（　　）

ご協力ありがとうございました　（下関短期大学「おいしいね　たのしいね！」担当者一同）

図 4　当日配布アンケート用紙

集計方法は、エクセルを用いた単純集計である。参加の 44 家族中 43 家族にアンケートへ回答していただき、回収率は 97.7%であった。

4・1　参加者について

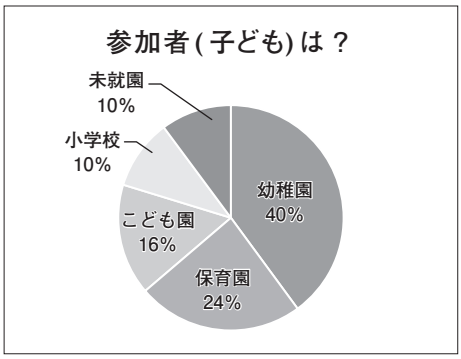


図５　幼児の参加者は？

前回の反省から、選択肢に「こども園」を新たに設けた。平成 28 年度は幼稚園が 54%、次いで保育園が 22%であったのに比べて、本年度は幼稚園 40%、保育園 24%、こども園 16%であった（**図５**）。今回は新たな選択肢ができたため、各項目での検討は難しいが、本事業の対象である幼児の割合（幼稚園、保育園、こども園の合計）は平成 28 年度 76%、本年度 80%と大きな変動はなかった。

4・2　広報（募集方法）と参加費について

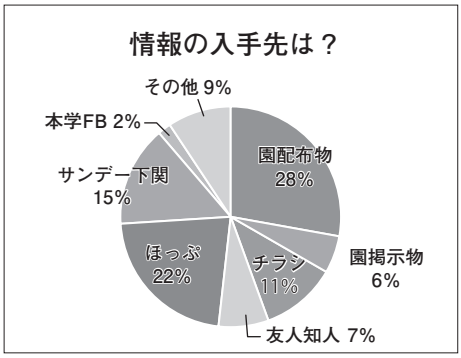


図６　情報の入手先は？

募集情報の入手先については、園配布物が最も多く、次いで「ほっぷ」、「サンデー下関」、チラシの順であった（**図６**）。市内幼稚園・保育所等へのチラシの郵送および「ほっぷ」や「サンデー下関」などの地域情報誌への掲載が大きな広告効果を生んでいることが窺える。また、昨年度のアンケートに下関短期大学の HP にものせてほしいという意見もあったため、今年度は本学フェイスブックにて告知を行った。2 %と少数ではあるが、フェイスブックを見て応募された方もおり、今後も継続して行う必要が感じられた。

4・3　調理実習について（担当教員：塩田博子、芳賀絵美子）

「おいしかったですか？」では「おいしかった」が 95%であった（**図７**）。クジラ肉という幼児には食べにくい食材をメインに使用したが、「おいしかった」と大多数の参加者が回答し、なおかつ、「おいしくなかった」と回答したものはいなかったことから、クジラ肉の調理方法や盛り付け、業者の選定などが適していたと推察できる。「調理を楽しめましたか？」に対し、全員が「とても楽しかった」、「楽しかった」と回答した（**図８**）。楽しさについても、先述したように（**3•1•2**）、「楽しみが持てる」ことに焦点を絞り、献立作成が成功した結果だと考える。

また、「栄養のお話は分かりやすかったですか？」については「とても分かりやすかった」が32%（平成28年度70%）、「まあまあ分かった」が53%（平成28年度30%）であり、「あまり分からなかった」が15%（平成28年度0％）いた（**図9**）。平成28年度の結果と比較すると「とても分かりやすかった」の割合が約半分に減少、0％であった「あまり分からなかった」が15%存在した。

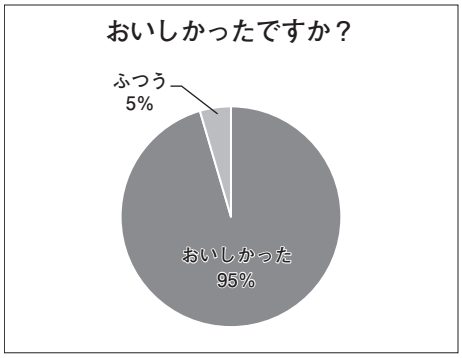


図7　おいしかったですか？

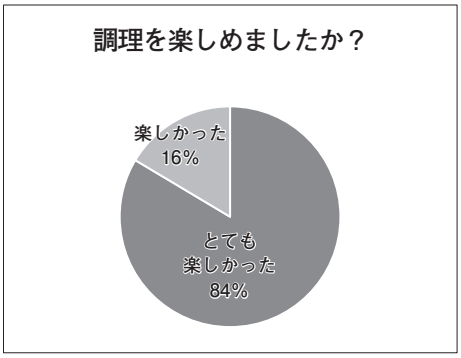


図8　調理を楽しめましたか？

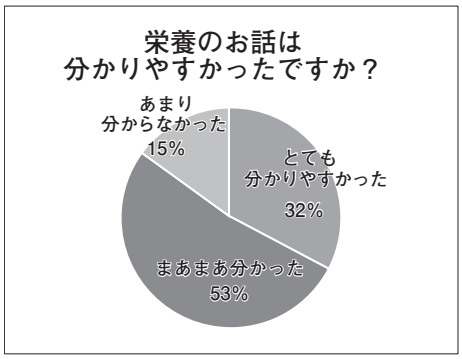


図9　栄養のお話は分かりやすかったか？

この結果より、会食時には食べる事に集中したいという意見が多い事が分かった。また、今回は講話担当者側の準備も十分ではなかったことも原因の一つと考えられる。来年度からは、十分な準備はもとより、一日ですべて終わらせるのではなく、複数日開催も視野に入れて、幼児に無理のないタイムスケジュールを組むことも考えていく必要があるように思う。

次回作りたいメニューには、「菓子」（5名）「パン」（3名）「和食」（3名）「郷土料理」（2名）「ピザ」（2名）などが挙がった。例年通り「菓子」や「パン」の希望者が多かった。今後も保護者の意見を勘案しながら本事業の目的である「家庭における『食育』の重要性を伝える」「子ども達に『遊び』を通じて食の楽しさ・大切さを伝える」を達成できるように、次回の開催方針を組み立てたい。

4・4　大型絵本読み聞かせ「くじらだ！」について（担当教員：高杉志緒）

午前中、会食時に行った読み聞かせについて2つの質問を行った。

1つ目の質問、「本の内容を理解できましたか？」では「よくわかった」16%、「まあまあ分

かった」44％で、合計約６割の参加者が理解できたことが分かった（**図 10**）。前回の「たからものはなあに」に対する同じ設問の回答の内訳は、「よくわかった」35％、「まあまあ分かった」47％で、合計約８割の参加者が本の内容を理解できたことに比べると、理解度が約２割減少したことが窺える。

２つ目は、理解度と読む早さの相関関係をさぐるため「本を読むスピードはいかがでしたか？」という質問を行った。回答は「とてもゆっくりだった」5％、「丁度よかった」88％で、約９割の参加者にとって、適度な速度での読み聞かせであったことが分かった（**図 11**）。

この結果から、読む速度は良かったが、約４割の子どもには分かり辛かったことが窺えた。前回より理解しにくかった理由として、１選書、２絵本の設置場所、３絵本読み担当学生の学科の違いが挙げられよう。

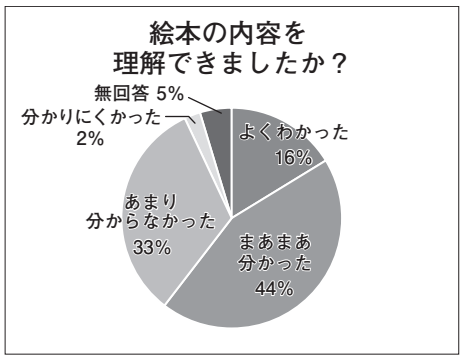


図 10　「絵本の内容を理解できましたか？」

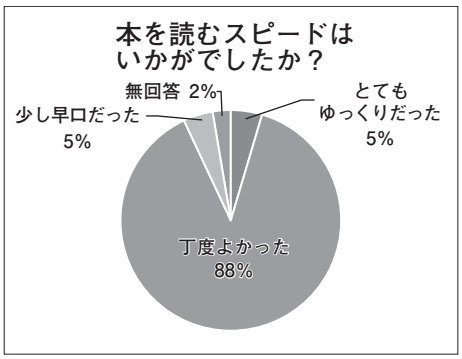


図 11　「本を読むスピードはいかがでしたか？」

１点目の選書については、内容が以上児向けであったことが挙げられる。今回のテーマ「クジラ」を題材にした大型絵本はごく少数であり、以上児向けの絵本しか入手できない状態であった。

２点目の絵本の設置場所は、参加者より「絵本が見えにくい場所（角っこで見えにくい）での読み聞かせだった」というアンケートの記述があった。事前に見えやすい場所を確認したつもりであったが、子どもの座高・前列に大人が座った場合も想定する必要があることが分かった。

３点目の絵本読み担当学生は、前回までと所属学科が異なっていた。つまり、３回・４回は保育学科学生だったが、今回は栄養健康学科の学生が行い実践的学習を展開できた点である。保育学科学生は、実習等を通じて絵本読みの経験を積んでいるが、今回担当した栄養健康学科の学生にとって読み聞かせは初挑戦であった。但し、正課授業との兼ね合いもあり、絵本読みの練習時間が十分に取れなかったことが反省点として挙げられる。成果としては、今回担当の栄養健康学科学生（２名）が、自主的に絵本読みに興味を持ち、ボランティア活動を実践した

ことである。また、今回の活動（6月24日・25日）をふまえて、7月9日㈰午後、他のボランティア活動（於：ふくふく子ども館）で同学生が絵本の読み聞かせを行ったことも成果に挙げられよう。

最後に、当初からの課題を挙げたい。それは、読み聞かせを行う時間帯についてである。第3回目以降、会食終了前に行っているが、今回、参加者アンケートの中で「食事中に絵本は集中できませんでした」という食事を終えていない家族からのご意見があった。午前：親子クッキング、午後：大型工作、という活動に加えて活動内容が過多になっている傾向があるため、実施内容について再度、検討を行いたい。

4・5 「クジラづくり」について（担当教員：堀尾昇平・濱田英司）

「くじらづくりの説明は分かりましたか？」では、「とても分かりやすかった」が55%、「まあまあ分かった」が43%を占め、「あまり分からなかった」と回答した方が2%であった。（**図12**）。「遊び方は難しかったですか？」では「とても簡単」と「まあまあ簡単」を合わせると88%となった（**図13**）。半数近くが、説明に対して十分には分からなかったと感じられたように「くじらをつくる」という目的意識ははっきりしていたものの、制作過程において完成へのイメージが湧きにくかったということが考えられる。また、曲線が多く、中心部が空洞となる大型の段ボール工作で、やや難しい制作活動を行ったことも要因として挙げられる。一方で、遊び方については、学生が適宜、援助や声掛けを行って充実感を味わえるように工夫したことによって、「わかりにくかった」参加者がいなかったと考えられる。

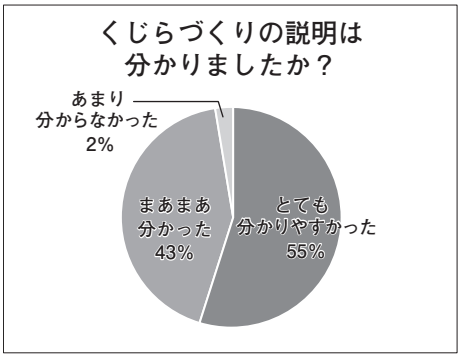


図12　くじらづくりの説明は分かりましたか？

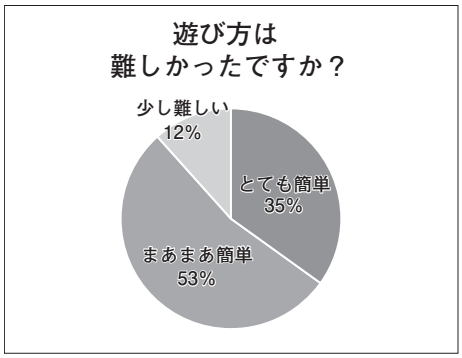


図13　遊び方は難しかったですか？

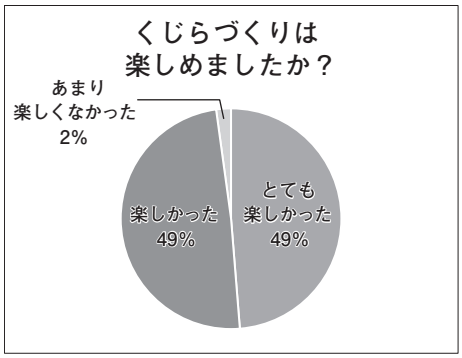


図14　くじらづくりは楽しめましたか？

また、「くじらづくりは楽しめましたか？」では「とても楽しかった」、「楽しかった」がそれぞれ49％を占め、「あまり楽しくなかった」と回答した家族が２％であった。（**図14**）。従って、総合的にみると、開催目的の１つである「親子がふれ合う時間と遊びの良さを味わう機会を提供する」、または「モノづくりの楽しさを味わう」という目的を概ね達成できたと考えられる。以上のアンケート結果を踏まえて担当教員の省察を次に述べる。

制作活動においては、全体を一気に作り上げていく作業であり、思わぬ混雑や怪我が想定されたため、各自の作業スペースが十分に取れるように配慮した。その結果、制作中は会場内を自由に行き来しながら、お互いが時にイメージを共有しながら活動を進めていくことにも役立った。進行については、教員が主に全体の進行を行い、各グループに２～３名の学生を配置したことで、参加者からの質問や子どもたちの声にもすぐに対応し、関わり合いを広げていくことができた。完成後クジラの中に入って遊ぶ時間では、隙間から顔を覗かせたり、クジラの体の中で全身を使って動き回ったりする姿がみられ、大型制作物ならではの楽しみ方が見られた。また、活動の最後に完成したクジラの前で記念撮影を行ったのはグループごと（各日２班）であったが、各々がイメージを広げ、協力して作り上げた作品を前にして集合することで、全体としてのまとまりと共に、存分に達成感を得ることができたと考えられる。

但し、反省点も挙げられる。１つ目は、事前の準備・環境構成が不十分だったことである。学生スタッフを中心として、前日に実際の活動内容を想定して会場作りを行ったが、それでも実施時に不十分と感じた。当日の作業効率や安全面を配慮して、試行錯誤を行ったつもりではあったが、開催直前まで段ボールや材料を置く場所の修正・準備を行う結果となった。

２つ目は、午前の活動を終え参加者が会場内に入ってきた後、その後の活動について伝える導入の折、落ち着いた雰囲気の中で十分に作業内容を伝えることができなかった点である。事前の説明・注意事項の伝達が子どもたち全員に対して十分に浸透していなかったため、制作活動における混雑につながってしまった印象がある。

３つ目は、制作活動を行う際の子どもたちへの関わり方についてである。合成繊維製のテープを水に見立てて自由に使えるようにしたが、事前に適当な長さに切り分けておらず、一人の学生スタッフが切り分けるために自由に動けなかったということから、必要量を事前に準備しておくべきであったと思われる。

以上のような反省点はあるものの、当初に定めた「親子がふれ合う時間と、ダイナミックな制作や遊びの機会を提供する」という目的は概ね達成できたと思われる。また、アンケートの結果に見られる参加者の満足度の高さからも、充実した活動であったと思われる。

4・6　全体について

「今日一日楽しく過ごせましたか？」という設問に対しては、今年度も「はい」が100％を

占めた（図 15）。

感想・意見欄には、「食後に体を動かす遊びがあってよかったと思います」「毎年楽しみにしてます !! 先生方のアイデアや企画や御準備など本当に感謝しております」等の好意的な意見が多数寄せられた。更に「“くじら”のテーマで（共通のテーマで）よかったです。家でくじらを食べる機会があまりなく、よかったです」という、クジラを共通テーマとして一日楽しんだ意見を頂いた。

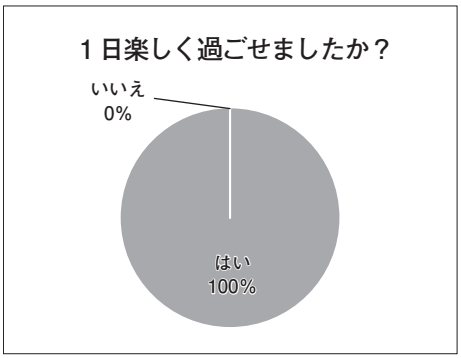


図 15　今日 1 日楽しく過ごせましたか？

また、「家で一緒に料理を作ったりするのはイライラしそうだけど、皆で作ると私もとても楽しく過ごせました」「家族で、特にお父さん参加はありがたい企画です」「このようなダイナミックな遊びは家ではできないので、楽しい体験になったと思います」といった意見より、本事業が、親子の触れ合い・家族間交流提供の場になったことが窺える。

但し、「大きな制作は家の中ではなかなかできなかったので、とても楽しく作ってました。みんなで協力してというのがいいですね。」という協力の楽しさを挙げた感想がある一方で、「親子クッキングは家族単位で家族分の料理がつくれると、他のご家族に気がねせず作れるのでは、と思った」という家族単位での活動や「料理だけ午前・午後でもＯＫです」という開催時間の短縮化を提案する意見もあった。従って、今後、活動班の単位・開催時間を再考する必要があると思われる。

5　おわりに　―今回の反省と今後について―

写真 25　調理台で作業する家族（奥）と表示した動物マーク「ネズミ」（手前）

前章のアンケート結果や各回終了後に開催したボランティア学生を交えた反省会をふまえて、6 つの観点（班分け、媒体展示、献立、食育関連の説明・講話、一日の流れ、ボランティア学生の参加）に分けて、総合的な反省・考察、今後の展望について述べる。

【参加者の班分け・託児について】

今回は、当日受付後に班編成を決定して開会式にて発表した（2【受付と班編成】）。前回から、動物マークを班別の使用としたが、今回は、出席

者の名札にはマークを付ける代わりに班の担当者（ボランティア学生）の名札と調理台に動物マークを表示した（**写真 25**）。そのため、現状に応じた編成を発表することができ、前回のアンケート記述にみられた「他の班の人が混じって作業をしていました」という意見もなく、参加者も戸惑わずに作業班にて活動できた。

写真 26　通路における食育媒体展示

写真 27　会場掲示ポスター「くじらのくにへようこそ」

写真 28　下関短期大学図書館エントランスホール展示風景「くじらのくにへようこそ」（媒体・大型絵本展示）

【媒体展示について】

第３回目は、午後の遊びの一隅に「清涼飲料水の糖分を砂糖に換算したもの」など、食育に関する媒体展示を行ったが、４回目は行わなかった。今回は、受付横に媒体を展示し、受付終了後、午前・午後の会場移動時、解散後に鑑賞できるよう工夫したところ、親子が手に取ってみる姿がみられた（**写真 26**）。ここでは親子の会話の中から、「これ、パパが大好きだよね。」、「こんなにお砂糖が入っていたんだね、飲む回数へらそうね。」などの声を聞くことができた。

また、今回の媒体展示では授業「栄養学実習」（栄養健康学科１年生後期・必修科目）にて制作したポスター（**写真 27**）、クジラの立体模型等を展示・使用した。学生は、単に媒体を作るだけではなく、制作後の使用・鑑賞について、実践的に学ぶ機会を得ることができた。

更に、学生が制作した展示媒体は、当日使用した大型絵本・絵本と共に、後日、図書館エントランスホールに展示し、当日、参加しなかった学生・教職員にも媒体展示を通じて本事業の公開および食育活動の推進に努めた（**写真 28**）。

【献立について】

今年度も平成 28 年度（前回）同様に、幼児と保護者の作業量を考えながら献立作成を心がけた。調理作業を少なくした分、前述（**3・1・4**）のように楽しみながら行える飾りつけの作

業を取り入れることができた。幼児がひとりでできる作業を多く取り入れることによって、自尊心を高めるよい経験となったと感じた。また、彩りの良い盛り付けやテーブルコーディネートにもこだわった結果、完成度が高く、参加者の満足感がより増したのではないかと考える。また、会食後、自分達が使用した食器の片付けの手伝いも行うことができたので、今後も献立作成時から、子ども達も自分で楽しめる作業・盛り付け・時間配分を考えて計画を立てたい。

【食育関連の説明・講話について】

今年度は、平成28年度よりテーマを決めていたため、授業での食育媒体作成時に、このテーマで作成した学生の媒体を交えて講話をすることができたことで、学生にも良い経験ができたと思われる。しかし、食事中の講話となった為、参加者全員が集中することが難しく、15%の方が、あまりよく分からなかったとのアンケート結果が出ている。次年度は、短時間でおこなえる内容の工夫が必要である。

また、通路のお菓子や飲み物の砂糖の含有量の展示については、調理室から工作会場への移動時や、閉会後、通路における食育媒体展示物について親子の声を聴くことができたことにより、次年度も展示を続けていくことが必要と思われる。

【一日の流れについて】

一日の流れについては、評価できる点と改善すべき点、双方１つずつ挙げられる。評価できる点は、午前・午後、全体の流れを考慮し「クジラ」という統一のテーマで活動を展開できた点である。「クジラ」という下関の地域性に基づいた主題に基づき、午前の調理と午後の遊びを主体とした活動を一体的に展開することができたので、参加者からも「“くじら”のテーマで（共通のテーマで）よかったです」という評価を頂くことができた。

改善すべき点は、前回からの懸案である開催時間である。予定終了時間15時に終了したが、前回のアンケート記述「長い。とても楽しかったが、子供の集中力・体力が切れることが心配だった」という意見に続き、今回も「料理だけ午前・午後でもＯＫです」という開催時間の短縮化を提案する意見があった（4・4）。従って、開催内容を見直し、午前のみ、あるいは午後のみの活動を考えることも必要と思われる。

【ボランティア学生の参加について】

本活動は、第１回目から教職員だけでなく、ボランティア学生・卒業生にもスタッフとして補助を依頼して実施してきた。しかし、第４回から顕著となった動向として、ボランティアに意義を感じ、積極的に参加する学生が減少している様子がみられることが課題として挙げられる。

例えば、午後の活動の援助を行った保育学科のボランティア参加学生をみると、参加人数の推移は、第５回：初日６名（１年生１名・２年生５名）・２日目３名（１年生２名・２年生１名）、第４回：初日11名・２日目７名（２年生のみ）、第３回：７名（１年生４名・２年生３名）、第２回：20名（１年生10名・２年生10名）、第１回：７名（１年生７名）という動向であり、今回

は前回と比べても約半数に減少していることが分かる。

その反面、今回の参加学生の感想として「（親子の触れ合い活動に参加する）中々この様な機会がないので今回参加できてよかった」「親子で協力し、一つの作品を作り上げていたのでこのような機会を増やして欲しい」「子ども達もとても楽しんでいたので嬉しかった」という親子活動に対する感想をはじめ、「何をしていいか分からず立ちつくしてしまうことが多かった。今後、積極的に行動できるようにしたい」という自己の活動に対する反省もあり、様々な場面を通じて参加学生は自己の学びを深めていることが窺える。従って、今後も学生における実践的学習―ボランティア活動の役割・意義の共有、充実感・達成感を味わえるような体験学習の展開など―について、課題としたい。

注）参考文献

（１）下関市編集発行：「下関ぶちうま食育プラン」, pp.46, 2008年
下関市編集発行：「第２次下関ぶちうま食育プラン」, pp.50, 2014年
（２）塩田博子・高杉志緒・芳賀絵美子・稲員祥子：「第１回「おいしいね　たのしいね」公開講座開催報告」『下関短期大学紀要』32号, pp.67-92, 2014年３月
（３）塩田博子・稲員祥子・高杉志緒・芳賀絵美子：「第２回「おいしいね　たのしいね！」公開講座開催報告」『下関短期大学紀要』33号, pp.53-71, 2015年３月
（４）塩田博子・高杉志緒・芳賀絵美子・稲員祥子：「第３回「おいしいね　たのしいね！」公開講座開催報告」『下関短期大学紀要』34号, pp.43-66, 2016年３月
（５）塩田博子・堀尾昇平・高杉志緒・芳賀絵美子・濱田英司：「第４回「おいしいね　たのしいね！」公開講座開催報告」『下関短期大学紀要』35号, pp.45-68, 2017年３月
（６）財団法人日本鯨類研究所監修『もっと知りたい！クジラブック』朝日小学生新聞, pp.22, 2006年４版
（７）食育エプロン「バナナうんちは元気なしょうこ　なんでも食べる元気なまあちゃん」（吉田隆子著：指導書付）株式会社ヤガミ, 2006年購入